

<原著> 糸賀一雄の「共感」思想に関する考察

著者	洪 浄淑, 松矢 勝宏, 中村 満紀男
雑誌名	心身障害学研究
巻	25
ページ	77-87
発行年	2001-03
その他のタイトル	<Original Articles>Reflection about Itoga Kazuo's Thoughts on Sympathy
URL	http://hdl.handle.net/2241/8662

原 著

糸賀一雄の「共感」思想に関する考察

洪 浄 淑*・松 矢 勝 宏**・中 村 満 紀 男***

本研究では、戦後の日本の障害児教育・福祉に大きな影響を与えた糸賀一雄の共感思想について、糸賀一雄の著作を通して検討した。共感思想の考察においては、共感という用語に関連する考え方に注目し、人間関係観としての共感思想、共感を中核とした新しい社会、その社会を形成していく自覚者・責任者の概念を中心に論じた。また、共感思想の根源をなしているのは、糸賀一雄の青年期思想であるという観点から、彼の青年期思想について分析した。その結果、糸賀における共感思想に内在する特質として、以下の点が明らかとなった。①人間存在を相互性・関係性に基づいて把握していた。②障害者と健常者の関係の在り方を、主体と主体の関係と捉えていた。③自己の内面を深く見つめ、また個々人が自分の内面を省察することを重視していた。

キー・ワード：糸賀一雄 共感 新しい社会 自覚者 責任者

I. はじめに

障害児教育・福祉の実践を豊かなものにするためには、障害に対する知識と理解を深め、その教育方法や援助のあり方を構想していく必要がある。しかしそれと同時に、障害児教育・福祉の内容を支え、方向づける根本の思想を明確にしておかなければならない。障害児教育・福祉における基本的な思想の確立は、障害児・者に対する一貫性のある総合的な教育・福祉施策や実りある実践へつながる土壌になるのである。

歴史の中でみられる障害児・者に対する偏見や差別は、そのあやまちが未だに克服しきれていないことを表している。しかし、社会の人々が障害児・者についての偏見を乗り越え、障害者の問題を深く理解し、真剣にうけとめることは、迂遠に思えても新しい歴史を開く鍵である

と考える。特に、障害児教育・福祉に携わるものたちにとって、自分なりの価値観や思想を確立することは大きな課題であるに違いない。なぜなら、障害児やその教育に対する考え方を明確にさせないと、その教育は単なる技術的なものに走ってしまうおそれがあるからである。

本研究ではこのような問題意識から、障害児教育・福祉の本質的な問題や社会の在り方にまで思索を深めた糸賀一雄の思想をとりあげ、検討することにした。糸賀一雄は、戦後の日本の障害児教育・福祉の歴史の中で、すぐれた実践家でありながら思想家でもあったといわれている¹⁾。そして戦後の社会的混乱の中で、近江学園を拠点としながら、浮浪児や知的障害児の対策を出発点として、重症心身障害児、知的障害者対策に至るまでさまざまな問題と取り組み、その道の先駆者として足跡を残したのであった。また、このような実践から、「発達保障」をはじめ、「共感」「自己実現」など、今日においてもなお、我々の心をとらえる思想を生み出し、日本の障害児・者の教育と福祉に大きな影響を与

*筑波大学心身障害学研究科

**東京学芸大学障害児教育学科

***筑波大学心身障害学系

えたのである。

ところで、障害児教育・福祉関係の文献に、糸賀一雄の思想に関する記述は多く見られるものの、まとまった研究はそれほどなされていない。その中で、糸賀一雄研究の代表的な研究者として、清水寛をあげることができよう。清水寛は、その著書『発達保障思想の形成』（青木書店、1981年）において、糸賀一雄の社会福祉理論の重要な内容をなす「発達保障」の理念・思想が糸賀の社会福祉の実践と理論のなかに、どのようにして形成されていったかを、近江学園の成立・発展過程に位置づけながら、明らかにしている。

発達保障思想とともに糸賀思想の中核的思想として共感思想をあげることができよう。清水は、共感思想を「どのように障害の重い者とも、『人間の人格性』という一点において共感しあい、高めあうことを、すべてのとりくみの基礎にすえようとする」²⁾ 思想と評価している。吉田久一は、「すべての人が自己実現のために、発達が保障されるべきであると考えた前提に、内における『共感』の思想と、実践的には琵琶湖³⁾ 学園における体験があった」³⁾ という。

先行研究においては共感思想についての記述はあるものの、それに重点をおいた研究がなされていない。しかし、深い理解を伴った相互の人間関係、心のふれあいというものを重視する「共感」の考え方をさぐることによって、障害者と健常者がお互いを受け入れ、すべての人々が社会の一員として共に生きる道筋をつかむことができるようになる。なぜならこのような思想が社会の考え方の基本をなす時、それは「弱くてもろい社会」⁴⁾ からの脱皮を意味するからである。そして障害児教育の根底に共感の思想がよこたわる時、それを基盤として、障害児が障害児としてその存在を人格的に肯定されながら、同時に無限の向上をめざしていく営みとしての教育の方法論がうち立てられる。

そこで本研究では、糸賀一雄の著作を通して、「共感」という用語を中核とする考え方に注目し、糸賀の共感思想についての理解を深めてゆ

くことにしたい。

II. 人間関係観としての共感思想

糸賀は、「人と生まれて人間となる」「人間関係こそが人間存在の根拠」であるという命題から、共感の考え方を導き出している⁵⁾。この場合人というのは、個体の人を意味する。この個体の人が人と生まれて人間となっていく。言い換えれば、社会的存在・関係的存在になっていくのである。そして関係的存在である人間が持っている人と人との間柄、すなわち、人間関係を共感の世界としてとらえている。糸賀が言っている共感の世界は、障害者と健常者との感じあえる世界、人格的交流の世界である。糸賀は、障害者は少数にすぎないという考え方から脱却し、障害者の現実を全面的に受け入れ、感じあえる世界をもつことを促しているのである⁶⁾。

そして、共感の世界は漠然としたものではなく、人間関係における一対一のなまなましいものでなければならない。糸賀は、「精神薄弱児自身を知るということは、精神薄弱児の一般論を知るということではないのでございます。つまりその子どもと、私なら私が、運命的な、なまなましいつながりをもつということにおいて、その子どもの心の中に入っていくことができる。向こうももちろんこちらの心の中に入ってくる。こういう一対一の人間関係においてしか子どもを理解することはほんとうはできないはずでございます。それが私は教育というものの真の姿であるべきだと考えております」⁷⁾ という。すなわち、糸賀の共感思想は、障害者を一般的・知的に理解するというより、個人の内面に入り、個人に共感するといった、感情の作用を含むものであるといえる。

さて、ここで注目すべきことは、糸賀の個々人の内面に向けられた認識である。糸賀は、「自己自身との対決」という言葉をよく使っているが、それは、障害者の問題を自分自身において問題にするという考え方であるといえる。障害者との共感の世界をもつためには、自分の内面を直視することが重要になってくるであろう。

このことに関連する糸賀の叙述をみることにしよう。

「身分、経済、人種の不平等や差別の克服が人類の課題となってから久しいが、いま私たちは生まれながらの能力のちがいがくくる差別観の克服に立ち向かうという、新しい課題の前に立たされていると思う。いまはまだ夜明け前であるが、この子たちをみる私たちの眼がどのように育つかということが、この課題解決の足がかりとなるということを思うのである。それはつまりは、この子たちの存在そのものが、自分自身との対立にまで私たちを立ち向かわせるということに外ならない。私たちは、この子たちの前に立って教育を語るまえに、自分自身を告白せねばならなくなる。」⁹⁾

ここから、障害者に対して差別の眼でみる社会の中にある個々人にとって、障害者についての差別観の克服は、自分の内面との一種の闘いでもあることが読み取れる。この対決なしに、障害者との共感関係は成り立たないといっても過言ではないだろう。糸賀は著作の中で、この対決を重視し、強調する姿勢をみせているのである。

一方、糸賀は、共感の世界の中で、お互いに育ち育てられ、育ち合うという関係を重視している。この育ち合う関係について、彼はさまざまな著作の中でくり返し言及している。それは、子どもを中核にして育つ関係であるが、子どもと関係する対象として糸賀は、主に教師ないし施設の職員、親、地域社会の人々を挙げている。育ち合う関係の対象に関連して糸賀は次のように記している。

「働いている人と世話されている人とが、共感の世界を持っているのですね。感じあっている。育ちあっているということ、子どもが育つだけでなく、それを世話している親ごさんが育ち、世話している先生が育ち、そして隣り近所の人までもが、地域社会の人たちが、やはりこういう人たちを中核として育っていくのであります。子どもをどうしようとかということよりも、私たちが育つことの方が大事なんでは

ないかというふうな感じを受けさせられたのであります。一中略一決してこの子たちが世話になりっぱなしの子どもたちではなくて、自分自身が世の中に対して働きかけようとしている人たちなんだということなんです。これを見失ってはいけない。世の中を変えていこうとしているんだ。受けるだけじゃない。人間の存在はね、恩恵を受けるだけでなく、受けた人にお返しをすること、働きかけていくこと、これが人間の実在といったものなんです。」⁹⁾

上述の文章に、ややもすれば一方的に育てられ、恩恵を受ける対象として見なされやすい、障害者に対する現実の考え方について反論する糸賀の姿勢をうかがうことができる。すなわち、糸賀は「従来考えられた対象者と主体者間の give and take を、重症者にも give の喜びを知らせ、過去の take のみの児童福祉と絶縁しようとした」¹⁰⁾のである。

さて、糸賀における共感思想において、生命という概念は重要な意味を持っている。糸賀は、「共感」について論じる際に、「生命」という言葉を重視しているのである。生命という言葉は、1950年代頃から使われるようになるが、この時期は近江学園の子どもたちがしだいに重度化、重症化していく時期である。従って、「生命」は、このような児童に対する指導・教育のあり方を考えつづけた末、生まれた用語であると解釈できる。

それでは糸賀における「生命」は、どのような概念であろうか。彼は、生命について次のように述べている。

「生命についていつも思うことは、それが知的に『何であるか』はわからなくても、生きているという事実は厳然と実在しているということである。それをわれわれは、肉体とか精神とかいわないで、一つの全体として、『我』として自覚しているということである。」¹¹⁾

ここでの生命は肉体と精神を含む人間の全体である。そしてこの生命は、人間における共通のものでもある。糸賀はこの人間に共通する生命の概念をとおして、共感思想の根拠づけをし

ているとみてよかろう。たとえば、糸賀は次のように述べている。

「ここにね、心身障害とか、精神薄弱とかいわれる人々とわたしたちが、実は根が一つなんだ、本当に発達観から見て根っ子が一つだという共感の世界を一理屈の上でもせめて共感の世界というものの根柢があることを、わたしたちは知りたいと思います。」¹²⁾

すなわち、障害者と一般の人々は根と表現されている生命の考え方からすれば、何もちがいが存在であるという共感の世界を糸賀は訴えている。

ここまでみてきた糸賀の人間関係観としての共感思想は、彼の社会についての見方にもなほどこか投影されていると考えられる。次は糸賀の社会に対する考え方を中心に検討してゆきたい。

III. 共感を中核とした新しい社会

人と人とのつながりを重視し、人と人との間に共感の世界を見出していた糸賀は、社会のあり方を人間の問題として把握する傾向があった。糸賀は、障害児が「人間関係や生産関係のなかに置かれるのが、社会に出ること」¹³⁾であるという。次の記述からもこのような糸賀の考え方をうかがうことができる。

「世界といい国家といえ、巨大なマンモスのような、どうすることも出来ないものを私達に感じさせるのでありますけれど、今静かにその実態を洞察しますときに、結局は、その国を、また世界を構成している私たちと同じ『人間』の問題に帰するのであります。政治も、経済も、文化も、みな個々人の考え方や働きに依存します。私自身が皆様と共に、世界の運命にかかわっているという事実は、私達をせんりつさせる真実であります。」¹⁴⁾

さて、糸賀は現実の社会をどのようにとらえていたのであろうか。結論を先どりしていうなら、糸賀の現実に対する見方は批判的なものであった。糸賀は、現実の社会について、障害者たちを「受け入れてくれようとしないう」¹⁵⁾社会

として表現している。また糸賀は次のようにも述べている。

「障害や欠陥があるからといってつまはじきする社会を変革しなければならない。しかし変革は突然にやってくるのではない。社会のあらゆる分野で、人びととの生活のなかで、その考えや思想が吟味されねばならない。基本的な人権の尊重ということがいわれる。しかしその根本には、ひとりひとりの個人の尊重ということがある。おたがいの生命と自由を大切にすることである。それは人権として法律的な保護をする以前のものである。共感と連帯の生活感情に裏づけられていなければならないものである。」¹⁶⁾

ここで描写されている現実の社会は、「障害や欠陥があるからといってつまはじきする社会」である。こうした共感に乏しい現実の社会に対して、糸賀は問題意識を抱かざるを得なかったのであろう。上記の引用文で糸賀は、現実の社会を「変革しなければならない」という。めざすべき社会は、「共感と連帯の生活感情に裏づけられている」社会として描かれている。ところで、「受け入れてくれようとしないう」現実の社会に置かれていた糸賀は、障害者のために、コロニーを構想することになる。

糸賀はコロニーを「新しい社会」と表現している。この新しい社会であるコロニーとは、はじめに働こうとする障害者を「がっちりうけとめてくれる社会」のことである¹⁷⁾。そして、その上にたって、次に、「新しい社会」としてのコロニーと、現実の社会との関係はどのようにとらえたらよいのかという問題を、彼は論じるのである。この問題に対して糸賀は、コロニーという社会を、一般社会から隔離されたものではなく、つながっているものとしてとらえていた。それは、病院や学校と同じように、必要なときにさしのべられる必要な手のひとつとしての社会のはたらきに他ならないのである。

糸賀はこのコロニーでの実践と理想的な社会の建設とを結びついたものとして考えていた。障害者について差別的な社会の現状を批判的に

とらえていた糸賀は、その社会を変革し、新しい社会の建設を目指していたのである。糸賀は変革された一般社会のことをも、「新しい社会」と呼んでいるが、彼にとって、この新しい社会とは、個々人が自分自身の心の中にある障害者に対する差別観を克服し、ひいては友愛的に共感する、共感を中核とした社会のことである。こうした新しい社会は、糸賀にしたがえば、福祉事業や特殊教育を通して、達成されうるのである。

さて、糸賀は常に新しい社会に向けての努力をつづけていたが、それは近江学園の設立当時から貫かれた精神でもあった。その精神は学園の教育指導体制にも反映されている。すなわち、学園の中から、障害児と健常児との連携を図っていたことである。学園の教育指導体制は、養護施設と精神薄弱児施設の二部制となっていたが、糸賀はそこに積極的な意味を見出している。次の糸賀の手による学園設立の趣意書から、それに関連する彼の考え方をみることにしよう。

「ところでそのように頭の悪いものと、そうでないものとを同じ学園に入れて、うまくやれるだろうかと心配される方があるかも知れません。勿論両方を一緒にまぜて授業したりしてはうまくゆく筈がありませんので、これは分けてやらなければなりません。しかし作業だとか遊びの時などは一緒になります。ここでは頭のいい子は難しい仕事を、頭の悪い子はやさしい仕事を受けて、それぞれ自分の持前を生かしながら、お互いに扶け合っていくという精神を養うのであります。これはなかなかむづかしいことでは、うまく指導すれば出来ない筈はないので、教育もここまで行かなければならないのではないかと思います」¹⁹⁾

糸賀は、このような健常児と障害児との連携を、「社会の本来あるべき姿」であるという。それは、糸賀にしたがえば、新しい社会と表現されうる。糸賀は新しい社会の在り方の原型を社会に提起しようとしたと考えられる。

ここまでみてくると、糸賀が描いていた理想的な社会像は、人間と人間が助けあい、受け入

れあう、理解と愛情でむすばれる社会、すなわち、共感の考え方にささえられ、共感を中核とした新しい社会であったということができよう。

ところで、糸賀は共感の考え方を中核とした社会をどのようにめざせると考えていたのだろうか。そこで、注目したいのが、糸賀の自覚者・責任者意識である。次は、糸賀のいう自覚者、責任者について検討することによって、新しい社会の形成に向けられた糸賀の認識を解明してゆきたい。

IV. 自覚者は責任者である

糸賀は著作の中で、「自覚者は責任者である」という言葉をよく使っている。そして、糸賀が自覚者・責任者についてふれる時、その自覚者・責任者の働きは主にこれまでみてきた新しい社会の形成に向けられていた。さて、ここで注目に値するのは、自覚者・責任者意識には障害者と健常者との人格的交流を通してお互いを深く理解しあうといった共感の世界への経験が前提されているとみられることである。言い換えれば、共感の世界への経験によって自覚という認識が生まれ、そこから責任をわかし合っていくとする責任者意識が芽生えてくるのである。

それに関連した、糸賀の叙述をみることにしよう。

「そして私は大変生意気なことをいうようでございますが、この映画¹⁹⁾をご覧くださいまして子どもたちとの共感の世界を味わってくださいました皆さまがたが、こういう世界に対する自覚者になっていただきたいと思うわけでございます。自覚者になる。こういう世界のことを自ら覚る。自覚する。しかし自覚するということは責任を負うということでございます。日本の国に本当に輝きがまいますように、世界が本当に平和と喜びに満ちますように、自覚者が責任を持ちます。」²⁰⁾

また、糸賀は施設がボランティアを受け入れることの意義にふれながら、自覚者・責任者についての見解を示している²¹⁾。彼の見解をみる

と、自覚者・責任者は、障害児との共感の世界に目覚め、この「不当な世間の差別観と戦い」、そして「愛と理解を中核とする新しい社会を創造していく」役割を担っていることが分かる。すなわち、糸賀が理想とする新しい社会の建設には、自覚者・責任者の存在と役割が重要な要素であるといえよう。

このような考え方は次の叙述にも見られる。

「自分たちもこの世にうまれてきた存在である。どんな障害をもってしようとも、うまれてきた生命は生きぬかねばならないと思う。それが当然なことだと思う。それではどのような生きかたをしたらよいのだろうか。障害の故に差別され、役に立たないからといって捨てられることは悲しいことである。そのひとの心情を思い、そのひとのかわりになって、誰かが叫ばねばならない。」²²⁾

ここでは、自覚者・責任者について明確に示されてはいないが、障害をもっていることによって差別され、見捨てられる現実を悲しみ、それに向かって叫ぶ誰かとは他ならない自覚者・責任者であると考えられる。

それでは、糸賀は、自覚者としての責任を具体的に誰が担うべきであると考えていたのであろうか。

まず、糸賀は、現に福祉実践に関わっている自分たちの働きを自覚者のそれと受け止めている。しかし、それを強い影響力を持つものとしてではなく、「ほんの小さな一隅を照らす」²³⁾働きと表現している。糸賀は自分たちの活動を通して少しずつ社会に影響を与えることを大切にしていたと思われる。それに関連して、糸賀は「福祉の思想」の中で、次のように記している。

「私たちは、天下を照らすような大げさなスタンドプレイは到底できないものであっても、与えられた一隅をまじめに照らすことはできる。その一隅はどんなに小さな片隅であっても、そこを自らの全生命を傾けて照らしつづけることを理想とすることは可能である。その実践が深く世界に通じ、歴史につながった生き方になると信じたい。」²⁴⁾

さらに、糸賀の自覚者・責任者意識において注目すべきことは、糸賀は障害児教育・福祉の現場だけに責任を求めたわけではなかったことである。糸賀は自覚的な責任を持つべき対象として、一般社会の人々、行政側、そして福祉の現場を考えていたとみられる。この三者が障害者の問題を深く理解し、責任意識をもって真剣に取り組むべきである、という考え方であろう。

糸賀自身は、言うまでもなくこのような自覚者・責任者意識を強く抱いていた²⁵⁾。その意味で、彼の一生は自覚者・責任者としての生涯であったといえることができる。

以上にみてきたように、糸賀は障害者との共感の世界にめざめ、そのなかで現実の社会の問題を見出し、共感を中核とした新しい社会をめざすようなはたらきを担当するものを自覚者・責任者と表現している。その概念は福祉事業や特殊教育に携わっているものをはじめ、社会の人々までを包含するものであった。糸賀はひとりでもこのような自覚者・責任者が増えることを願って働きつづけたのである。そして、社会の人々のなかに、自覚と責任意識が盛り上がることによって、新しい社会の形成が可能になるとみていたのであった。

V. 共感思想の考察

本研究では、「共感」という用語に関連する考え方に注目し、人間関係観としての共感思想、共感を中核とした新しい社会、その社会を形成していく自覚者・責任者の概念を中心に論じた。

糸賀のいう共感の世界は、障害者と健常者との感じあえる世界であり人格的交流の世界のことである。この世界は、障害者の問題を自分自身において問題にする自己自身との対決を要する世界であり、共に育ち合う世界でもある。そして彼は共感思想に「生命」の概念を取り入れることによって、障害者と健常者の共通性を訴え、平等な相互作用としての共感思想を根拠づけた。

糸賀は一貫して障害者の問題を社会との関連でとらえている。しかし、現実の社会は障害者

を受け入れようとし、しない差別的で共感に乏しい社会である。このような社会に対して糸賀は共感の考え方に支えられ、共感を中核とした新しい社会像を提示し、それを目指して働きつづけたのである。

そして新しい社会を築き上げる主体を自覚者・責任者と呼んだ。自覚者・責任者は障害者との共感の世界に目覚め、現実の社会変革の責任を分かち合っている意識をもつ者のことである。すなわち、糸賀が理想とする新しい社会の建設の役割は、自覚者・責任者が担っていることになる。自覚者・責任者意識は、福祉事業や障害児教育に携わっているものをはじめ、社会の構成員である一人ひとりに求められていた。

ところで、クリスチャンであった糸賀は大学時代、宗教哲学を専攻した。そのことによって、彼の宗教哲学的思索が深められたことは言うに及ばない。糸賀の青年時代における宗教哲学的思索は、のちに障害者の問題を「人間存在」の問題として深化させた重要な要素の一つであると考えられる。糸賀にとって宗教哲学的思索は、人間存在についての問いでもあったのである。そして今までみてきた共感思想の根源にこのような人間存在に対する思索からの影響があったと考えられる。従って、糸賀における共感思想をもっと明確に理解するために、糸賀が青年時代に人間存在をどのように捉えていたのかを明らかにする必要性が浮かび上がってくる。

このような観点から、彼が大学時代に書き、内容が主に人間存在に向けられている三つの原稿²⁶⁾を分析、検討した。そこから明らかにされた認識の特質を簡単に示すと、次の通りである。

糸賀において、人間存在を問うことは自己そのものへの問いであったということが出来る。三つの原稿で自己は、我、私、主体とも表現されている。糸賀はこの自己を徹底的に問いつめることによって、人間存在を究明しようとした。

ところで、人間は基本的に自己に固執する傾向をもち、利己的になりやすい属性の持主であると糸賀はみる。しかし、そこに留まることは

結局自己の存在意味を失うことになる。自己は社会的・歴史的な世界の中であって、他の人々とのつながりにおいて存在するからである。

それに関連して糸賀は、人間は死すべき、有限的・相対的存在であるため、自己の存在根拠を自己に所有しないという。そこで彼は自己がおいてある場所をたずね²⁷⁾、自己が世界との、そして他者との関係の中に存在していることを見出すのである。

従って、糸賀の人間存在のとらえ方を一言でいうなら、「関係的存在としての人間」であるといえよう。すなわち、他者なしに自己も存在しえない。そして他者にどのようにかわるかが自己の存在意味を決定するというのである。

ところで糸賀はその関係のあり方をどのようにとらえていたのであろうか。

糸賀は、自己が他者と関係するという際に、その関係する他者は、単に、主体に対する客体という意味を持つのではないという。換言すれば、関係する他者は、自己の関係の客体として自己の処理に委ねられた対象ではなく、自己にとって他の主体、すなわち、人格的他者となるのである。

要するに、糸賀は人間関係のあり方を主体と主体との関係からくる人格の世界に求めていたとみることができる。このような人格的關係をとおして真の生の共同が営まれる。したがって他者を自己に対する客体としてとらえることは、生の共同を拒否することに他ならない。糸賀はこのような生の共同を揺るがないものにするのは、アガペーの愛であるにとらえていた。

このような糸賀の人間への思考は、彼の全生涯を貫いているように思われる。そして、糸賀の人間存在に対する思索が、近江学園での実践の中で確立された共感思想に反映され、一貫して流れているといえよう。糸賀は大学時代において、人間は主体と主体としての人格的關係を結ぶべき関係的存在であると捉えていた。そして糸賀における共感思想は障害者と健常者の人格的交流關係を中心とする人間關係観といえる。このように、糸賀の大学時代の思索と共感

思想におけるもっとも著しい特徴は、人間を関係的存在として捉えた点にある。

このようにみえてくると、糸賀における共感思想の根底をなすものは、糸賀の青年期の思索であったと解釈することが出来よう。糸賀はこのような思想的基盤をもって近江学園での実践に入っていくことになる。

以上の点を踏まえて、最後に、糸賀における共感思想に内在する特質を示すと、次の点をあげることができよう。

第一は、人間存在を相互性・関係性に基づいて把握していたことである。

共感とは、共に感じることであり、また共同感情とも言い得るであろう。つまり、共感とは実在する他者との間に生じ、仮想的な存在との共感是有り得ないのである。従って、共感の働きによって、他者の存在を否定する自己中心的な考え方・生き方が克服できるといえる。糸賀は、障害者の存在を無視し、否定しがちな世の中に対して共感の考え方を提示したのであった。それによって、障害者と健常者がお互いに影響しあい、成長していく生き方を促しているのである。

このような考え方は、糸賀の次の叙述にも明確に示されている。

「私たちは教育や教養の世界が、人を押しのけたり、足をすくったり、争ったりするような闘争と陰謀の世界でないことを願います。自分や貧富や能力の格差を超えて、お互いに人間として共感しあえる間柄を育てていきたいのです。世界や人類のというのではなく、隣近所のなかで、私たちの茶の間の話題として、至極あたり前のことになるようにつとめていきたいと思っています。」²⁸⁾

第二は、障害者と健常者の関係の在り方を主体と主体の関係と捉えていたことである。

従来の支配的な障害者観は、障害者を一方的な恩恵の対象と捉えるものであったといえよう。それは、障害者とかかわる主体者に委ねられた対象としての障害者像ともいえる。しかし糸賀は、障害者と健常者が影響し合い、育ち合

う共感の関係を強調していた。すなわち、それはお互いを人格として尊重する主体と主体との関係である。共感思想は自己と等しい実在する他者を前提するが、それについて考えを深めると、両者の間に共感関係が成立するためには、他者を自己とは異質の他者として理解しなければならないことが分かる。なぜなら、この世の中の人間は、同一である者ではなく、一人ひとりが唯一の独自の存在であるからである。

このようにみえてくると、他者を主体として捉える考え方には、自分と異質なものを受け入れ、理解しようとする意識があるといえよう。その意味で、障害者を主体としてとらえない限り、障害者と健常者の人格的人間関係観である共感の世界は成り立たないのではなかろうか。したがって、共感思想が、お互いの違いを認め合い、またお互いを人格として捉え、受け入れ合う相互作用である以上、両者は主体と主体の関係を持たなければならないのである。

糸賀は、いくら重い障害を持つ子どもであっても、「感ずる世界、意欲する世界をもっている」²⁹⁾という。すなわち、主体として他者と共感の世界を形成する存在として描いているのである。そして糸賀は、障害児に対する指導が相互関係をとおして、お互いに高められてゆくものでなければならないと認識していた。

また、施設養護の目標と関連する記述³⁰⁾から、糸賀は、障害をもつ子どもが主体的な人間になるような障害児教育・福祉実践を目指していたことが窺われる。それは指導する側と子どもとが主体と主体として歩みだす共感の世界への追求でもあった。

第三は、自己の内面を深く見つめ、また個々人が自分の内面を省察することを重視していたことである。

糸賀は、子どもとの共感が自分自身の心の成長をとおしてもっと深くなることにふれている³¹⁾。また、共に育ち合う共感関係を重視していたのであった。しかし、このような関係が成立するためには、自己自身の内面的な変化が伴わなければならないのである。それは、換言すれ

ば、「価値なき者」とされやすい障害児の価値にめざめ、その価値を発見していく内面的な人間の変革ともいえる。糸賀は、このような内面的な変化を人々に呼びかけたのであるが、誰よりも糸賀自身、自分との対決に厳しく臨んだのであった。このように、共感の世界は自己自身が全人格的に問われている世界であり、共感に基づいた関係成立の前提として、自己自身の成長・脱皮が必然的に要求されていたのである。

さて、人とのつながりを重視し、人と人との共感の世界に社会を見出していた糸賀において、社会の個々の構成員の在り方は社会の在り方を決定するものであった。糸賀にとって新しい社会とは、個々人が自分自身の心の中にある障害者に対する差別観を克服し、ひいては友愛的に共感する、共感を中核とする社会のことであった。すなわち、新しい社会の建設は、個々人の変化によって社会が本質的に変革する時に達せられるのであって、その建設は、社会の人々の課題であると同時に、自分自身の課題として迫ってくるのである。

以上、糸賀の思想の中核をなす「共感」思想について、その特質を分析した。

今後の課題は、本研究を基礎として糸賀の障害児教育・福祉思想に関する研究を深めていくことである。その際、清水寛も指摘しているように、糸賀思想を「近江学園の成立・発展過程のなかに一とりわけ職員集団による実践・研究・運動のあゆみと結合して正しく位置づけること」³²⁾が必要である。なぜなら、糸賀の障害児教育・福祉思想は、糸賀自身を含む近江学園の職員集団の実践と研究の蓄積・発展を媒介として成立したものである。

したがって、今後は糸賀個人に焦点を当てるに留まることなく、近江学園との相互関係の中で、糸賀の思想がどのように確立されていったかについて研究して行く必要があると考える。

本研究中で引用する用語、文章等は、原則として、当時のものをそのまま用いている。

注および参考文献

- 1) 吉田久一 (1974) 社会事業理論の歴史。一粒社, 384.
- 2) 清水寛 (1981) 発達保障思想の形成。青木書店, 213.
- 3) 前掲書 1, 389.
- 4) 国連総会が 1979 年に決議した「国際障害者年行動計画」に述べられている「ある社会が、その構成員のいくらかの人々を締め出すような場合、それは弱くてもろい社会である」という考え方は、いかなる形態の差別や偏見も存在させない社会を意味している。
- 5) 糸賀一雄 (1972) 愛と共感の教育。柏樹新書, 32.
- 6) 糸賀一雄 (1983) 糸賀一雄著作集Ⅲ。日本放送出版協会, 295.
- 7) 糸賀一雄 (1982) 糸賀一雄著作集Ⅱ。日本放送出版協会, 300.
- 8) 糸賀一雄 (1968) 福祉の思想。日本放送出版協会, 178-179.
- 9) 前掲書 5, 90-91.
- 10) 前掲書 1, 387.
- 11) 糸賀一雄 (1982) 糸賀一雄著作集Ⅰ。日本放送出版協会, 366.
- 12) 前掲書 5, 35.
- 13) 前掲書 7, 134.
- 14) 前掲書 11, 256.
- 15) 前掲書 11, 340.
- 16) 前掲書 8, 15.
- 17) 糸賀一雄 (1965) この子らを世の光に。柏樹社, 204-205.
- 18) 前掲書 17, 61.
- 19) この映画というのは、「夜明け前の子どもたち」を指す。この映画は、糸賀一雄、田中昌人らにより、1967 年 4 月頃から 1 年がかりで、「びわこ学園」での療育活動を記録したドキュメンタリー映画である。
- 20) 前掲書 6, 296-297.
- 21) 前掲書 6, 327-328.
- 22) 前掲書 8, 60.
- 23) 前掲書 17, 320.
- 24) 前掲書 8, 52.
- 25) 『糸賀一雄著作集Ⅰ』(429 頁) には次のような注が記されている。

「糸賀園長は、子供たちのために法や制度が運用されることを願って、政府や行政当局に働きかけ協力するとともに、近江学園長や法人の役員としての立場で、あるいは、施設、学会、研究会、親の会などの役員としての立場で、精神薄弱児のための制度の改善、施策の正しい実現を願って、実践にもとづく検討を重ねられた上で、率直に意見を提出された。それがまた、社会的責任を果たすことであると自覚しておられた。」

- 26) 糸賀の青年時代における文書、論文などは殆ど未公開のものであり、半分以上は生原稿である。キリスト教の信仰に関するものが多く、また宗教哲学的関連の論文や日記なども含まれている。糸賀の青年期の思索を理解するために、この史料（現在、福祉法人大木会に保存されている）の収集を行い、検討した。本研究では、その中から共感思想と密接に関わっていると思われる三つの原稿―「関心」（1936年、500字原稿用紙7枚）、「人格的実在者―人間存在の側面的考察を媒介として」（1937年、500字原稿用紙22枚）、「人間の存在根拠」（執筆年不明、大学時代に書いたものと考えられる、500字原稿用紙9枚）―を中心に分析を行った。それらを通して糸賀は人間存在に対する考察を試みているのである。

- 27) 糸賀は、「人間の存在根拠」の中で自己の存在根拠が自己にないことにふれながら、次のように述べている。

「根拠が自己のうちにないとすれば、その自己が於てある地盤にこそ次に問はれるべきであらう。所でここにいふ地盤とは決して私一人の地盤ではあり得ない。一中略―私は私が於てある世界に於て関係的な存在である。私は私が『於てある』といふ意味に於て世界との関係を持ち、同時に、私と同じくこの世界に於てある他の人格との関係を持つのである。併し一度この関係的存在としての自己に目を注ぐときに、自己の立つ地盤は単に自然的な世界を意味するのみではなく、むしろ此の関係そのものであることに気づかざるを得ない。私は私が置かれている此の世界との関係の中に、この地盤の上に立っている。そして同時に私はこの世界に於て、汝との関係の中に、此の地盤の上に立っているのである。」（傍点
は原文のまま）

- 28) 前掲書 6, 288.
29) 前掲書 7, 250.
30) 前掲書 8, 150.
31) 前掲書 8, 148.
32) 前掲書 2, 238.

Reflection about Itoga Kazuo's Thoughts on Sympathy

Jeongsuk HONG, Katsuhiko MATSUYA, and Makio NAKAMURA

This study presents the reflections of Itoga Kazuo's thoughts on sympathy. The study focuses on his work, which had a great impact in the field of education for children and with disabilities on the welfare system in Japan after World War II. The concept of thoughts on sympathy and its assumptions were considered to explore it. Therefore the thoughts on sympathy were described in human relations, a new society with a concept of sympathy as its core, with the society's members public awareness and responsibilities. In addition the study analyzed Itoga Kazuo's concept of sympathy in adolescence period as a basis. As a result of investigating Itoga Kazuo's thoughts on sympathy's assumptions the study pointed out the following.

- ① Human beings only could be recognized in interrelation and mutual understanding.
- ② The relation between disabled and nondisabled people was considered as a relation between identicals.
- ③ It was emphasised to look deepen into the concept of self and find out each individual's own identity.

Key words : Itoga Kazuo, sympathy, a new society, person with awareness and responsibility